

2018年11月4日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「すべての民の祈りの家」

聖書：イザヤ書56：1～8

56章からの時代背景は、捕囚地バビロンからユダの地へ帰還した直後の出来事として記されている。神殿の再建が成さる中で、皆で礼拝を捧げることにあつたが、ここに来て不平がでた。帰還してきた者の中に異邦人、宦官がいたことにあつた。宦官とは去勢された男性のこと。そのような者と礼拝を捧げることは出来ないというのである。

その仕打ちに異邦人、宦官たちは自らを卑下した。その状況に神はこう宣言される(3-6節)。異邦人にも宦官にも自ら卑下をしてはいけないと神は言うのである。宦官に対しては、神は「彼らのために、とこしえの名を与え／息子、娘を持つにまさる記念の名を／わたしの家、わたしの城壁に刻む。その名は決して消し去られることがない」と言う。「息子、娘を持つにまさる」とは、彼らは去勢された者ゆえに子を持つことは出来ない。しかし神は、「息子、娘を持つにまさる記念の名を」と言うのである。神の慰め、愛が宣言されている。

「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」この言葉は、神を礼拝する者はどのような人であっても、すべての民の賛美を礼拝を、神は受けるといふこと。私たちの教会は、すべての民に開かれているだろうか？この人はOKだけど、この人はどうもといふことはないか？

ここ数年、「セクシャルマイノリティ」という言葉がよく聞かれる。性的少数者(同性愛者)という意味。もっと細かく分類した言葉としてはLGBTという言葉がある。那覇市は2015年7月19日に「性の多様性を尊重する都市・なは」宣言をしている。

その宣言文には、…。

「人がどのような性を生きるか、また、誰を愛し・愛さないかは、すべての人が幸福に生きるために生まれながらにして持っている権利、すなわち人権であり、誰もがその多様な生き方を尊重されなければなりません。那覇市は、市民と協働し、性自認及び性的指向など、性に関するあらゆる差別や偏見をなくし、誰もが安心して暮らせる都市をめざして、ここに『性の多様性を尊重する都市・なは』を宣言します。」とある。

教会は、この宣言を掲げることが出来るのか？教会の弱さを覚える。神は「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」と宣言されているではないか。その神の言葉に揺さぶられながら、「すべての多様性を尊重する教会」として宣言を掲げて行きたい。(神谷)